

一文字一文字に仏様の教えを感じる

# 第三十五回 高尾山写経大会

七月二十四日(日)第三十五回高尾山写経大会が有喜閣大広間に於いて開催され、ひぐらしの鳴き声が響く中、約四百十名の方が参加された。参加者は写経大会の開会式に際し、山内の僧侶と共に般若心経を誦誦し、心を込めて一心に写経されていた。

昼食の後、午後一時から八王子市内の妙葉寺住職で、国際教養大学特任教授や國學院大学講師を務める金岡秀郎先生により、「お地藏さまと閻魔様」と題した講演が行われた。



山内の僧侶と共に般若心経の読誦をする



金岡秀郎先生による講演「お地藏さまと閻魔様」

## 三度のエベレスト登頂 三浦雄一郎さん 高尾山で講演

七月十九日(火)、「山の日」の制定を記念して、「三浦雄一郎氏と登る高尾山」が行われ、百名を超える方々が記念登山をされました。その後葉王院の有喜各大広間に、八十歳でのエベレスト登頂達成で知られる、プロスキーヤーであり、登山家の三浦雄一郎さんが「登山が人生を豊かにしてくれる」と題された講演をされました。

講演の中で三浦さんは、三度のエベレスト登頂や、七大陸最高峰でのスキー滑降の経験などを踏まえ、「山は体と心に活力を与えてくれる、山は最高の病院であり、アンチエイジングだ。」と話しておりました。

講演の最後には、現在は八十二歳を迎えたが、また体を鍛えて、世界の山を登ってスキーがしたいと力強く語っておられました。



もう一度世界の山に登りスキーをすることが目標だと語る三浦雄一郎さん

## 山の祈り自然の響き

### 山伏の役目

法務課 佐藤秀仁

24

我国に千三百年以上続く日本固有の宗教である修験道は、明治時代に発令された修験道廃止令により大打撃を受け、わずか百数十年余りの間に、口伝を重んじる山伏達は激減し、その姿は今では非常に珍しいとされています。しかしそうした中、私

ども真言宗智山派内に於いては、沖繩から北海道までの智山派各寺院や各地域の青年会主催による霊山での入峯修行会や勉強会、柴燈護摩や火渡りなど、修験道の活動が積極的に行われております。平成二十五年十一月には、全真言宗青年連盟の行事として、智山青年連



山に尋ね入り、仏法を全身で学ぶ

合会が主体となり、宮城県東松島市野蒜海岸に於いて大規模な震災慰霊法要が営まれ、智山派の青年僧侶による八十丁余りの法螺貝の音が被災地に鳴り響き、力強い祈りが捧げられました。

このように、修験道の法灯は、今を生きる僧侶達へ確実に受け継がれているのです。

さて、山伏達が活躍した古の時代からは、社会的にも宗教的にも事情が全く異なる現代社会に於いて、とかく今の人は信仰心が無いなどと云われがちですが、様々な修験道の行事に参列される参拝者が、真摯に手を合わせる姿勢を見る時、必ずしもそうでは無い事がよく解ります。

人々が、仏教を含む宗教に求める事とは、ただご利益にあやかりたいとか死後の安楽などでは無く、現代調の人間苦からの解脱とでも云うのでしょうか、(経済面、人間関係、就職や進学への不



## 歴代先師お墓参り

本年もお盆を迎え、七月十二日には山麓不動院にて施餓鬼会、十三日と十六日には、それぞれ迎え火と送り火を焚き、歴代先師墓地にて、懇ろに御回向されました。

高尾山の墓地には、歴代御貫首様のお墓を始めとして、高尾山のために尽力した方々のお墓があります。

安、生命の有限等々。)人生を如何に生きていくか、という真剣な問題に集中しております。

しかし、こうした生活の中での苦しみとは、大変な問題であり、人間として生を授かった以上避けては通れない事も確か事であり、まさしく人生そのものが修行であると云えるのでしょうか。

そうした人々の心の奥深くにある切なる問題を、私達の崇める祖師先徳は、信仰により整理し、安心

の境地を証明して今日まで伝えてきました。

山伏は、それを具体的に実践する方法を求め、為に山に尋ね入るのです。仏法を全身で学んだその心をもって、世の中に広く応じて行く事が山伏の重要な役目、即ち実修実証となるのであります。

実践的宗教者である山伏へかかる期待は、今後益々高まる事でありましょう。

(生きる力 SHINGON 第八十三号より転載)